

II Rijksmuseum voor Volkenkunde 民俗博物館

ライデンの民俗博物館にはシーボルト、プロムホフ、フィッセルの各コレクションなどがある。そのうちから二、三の紹介。

- 1 [I-4396] 桂川甫賢「人面瘡図説」木版刷二点。うち一点には甫賢自筆による淡彩色が施され、日付と署名の蘭訳が付記されている。

詳細は本誌次号掲載拙稿「ライデン民俗博物館所蔵、桂川甫賢『人面瘡図説』について」参照。

- 2 [I-4393] Eenige aantekeningen nopens de Honing Byen, door M. Tok'nai

蜜蜂に関する若干の記述 最上徳内

最上徳内の本作品は従来学界に紹介されることがなかったものの。写真を添えて、拙稿「最上徳内作『蜜蜂に関する若干の記述』について」を用意している。

- 3 [578 No. 63] 丁卯萬國普通曆 慶応二年丙寅十月

司天官 渋川敬典謹考

これは慶応三年分の曆であるが、加うるに蘭文で Almanak in het jaar 1866 即ち慶応二年分の曆が N.R. Araki なる人物によって記載されている。因に『國書總目録』による限り、渋川敬典の編になる萬國普通曆は安政四・五・六・万延元の各年度分しかしられていた。

- 4 [I-4646] KALIBO ZU, Toow Komoli, der medicijnen

Doctor te miao, 淡彩自筆の小森桃塙「解剖図」である。
(一九八三・九・一七、日本医史学会・蘭学資料研究会 合同例会 発表)

緒方家本「和蘭詞解略説」について

沼田次郎

本書は緒方洪庵のオランダ語学関係の著書の一つで、現在緒方富雄氏所蔵本が唯一の完本であろうと思われる。写本、一冊、堅一四センチ横二〇センチの小型横長の袋として丁数二二丁の小冊子である。但し本書も洪庵の自筆ではなく後年緒方家で入手された写本である、という。伝本きわめて少なく、杉本つとむ博士がその大著「江戸時代蘭語学の成立とその展開」IIの中に指摘されたように東京大学付属図書館に「客窗漫筆」という写本があり、その中に本書の巻首の部分が九丁にわたって収められている。その他に図書総目録によると広島大学・正宗文庫に夫々一本を有するが前者は焼失、後者は現存するかどうか明らかでない。

本書の内容について簡単に述べると、本書はオランダの品詞について解説したものである。まず「詞類」として名詞・陪名詞・数詞・代名詞・動詞・副詞・冠詞・前詞・統詞・感詞の一一品詞のあることを説き、次いで夫々についてその性質・用法・変化等について説明している。恐らくは当時用いられた文典類から訳出しまとめたものであろう。緒方家本の表紙には「万延元年喜多山祐吉先生所贈 土屋裕□」と記されており、本文冒頭には「緒方家公教訳述」とある。その他に成立の年次などについて手掛りとな

るものがなく、成立の年次は判らないが、緒方家では、洪庵が若くして坪井信道塾で研鑽を積んでいた頃の著訳の一ではないか、と推測されている。

跡見玄山と適塾

田崎哲郎

跡見玄山は、適塾姓名録番号三九四番、安政三年（一八五六）

十月十六日に入門している。その略歴は蘭研十五回大会の折富安次氏と共同で報告したので、蘭研研究報告二七一号を参照されたい。ここではその後出てきた同人に関する資料の中、適塾と関連のあるもの二、三を紹介する（史料コピー配布）。

一、玄山の医師、三河国額田郡本宿村の医師宇都野龍碩より玄山宛の手紙、安政四年三月十二日付（読み下し文は拙稿「在村蘭方医の一樣相」愛知大学文学論叢六九に載せてある）。

文中岩崎または俊斎という人物について記しており、同人を玄山が龍碩に紹介した手紙を前に出している様子である。これは安政元年四月に適塾に入門した薩摩藩の岩崎俊斎のことと思われる。同人は同藩の他の二人と共に、青木周弼門にいたのを島津斎彬の命で適塾に移っていた。龍碩は、長崎に留学したことがあり、周弼は出府の途次、東海道に面している龍碩宅にいつも立寄っていたといわれ、龍碩は周弼に蘭方医学の示教を受けていたようだ。龍碩と周弼の関係を前提に、もと周弼門にいた岩崎の事を知らせたものと思われる。鎖陰の治療法について適塾に新工夫はないかと尋ねているが、龍碩は実兄や従兄が華岡門下であり、同

門で知られた鎖陰の手術法について、適塾入門前に華岡門に一年間いた玄山の華岡流の知識を前提に、一層の良法を質問しているといえよう。この頃三河の岡崎近在では「聖京偈」(シンキング、流行性感冒)が流行しているが、大阪でも同様と聞いているように大流行がうかがえる。なお玄山は、三月頃帰京するかもしれない旨前に知らせていたようである。

二、玄山から龍碩宛の手紙、安政四年五月一日付。江戸から帰郷の途中の島津斎彬が四月二〇日に大阪に着き、岩崎俊斎を呼び出して、江戸に行くように命じたので、岩崎の他二人が五月一日出立した。玄山は早く帰郷のつもりだったが、岩崎との同行を考えて遅らせていたところ、岩崎が君命で出発が早まり、玄山は丁度風邪で遅れてしまった旨報している。ところで大村益次郎の鳩居堂の門人籍をみると、五月二六日のところに、岩崎、有馬洞運、松崎鼎甫の三人の薩藩関係者の名前が出ている。岩崎、有馬は周弼門、洪庵門、益次郎門と君命で動いており、より軍事科学的な方向へと進んでいったとみられ、薩摩藩のこの段階で洋学的人材の養成に、斎彬の意向が強く働いていたことがうかがえる。薩摩藩の洋学の荷い手の中、中堅的な人々についてはよくわかっていないだけに、この事実は注意されるが、その後の三人についてはわからない。松崎は『福翁自伝』に福沢が長崎で最初にオランダ語を習った人物として出ており、さらに適塾に後からはいつてきた松崎に福沢が教えたように書いてある。しかし適塾入門は松崎の方が早く、『福翁自伝』にみられるいくつかの矛盾した記述の一つになっている。松崎は村医の子弟だが、藩の命令下にあっ